ひこうじょう　ツチノコ視点版

くにむらせいじ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ツチノコによって、飛行機が発見された。ツチノコが中心となり、フレンズたちが協力して、飛行機を飛ばそうとする。飛行機の修復、パイロットの選抜、操縦訓練などが行われ……。

※「ひこうじょう（通常版）」（三人称視点）をツチノコ視点（一人称視点）に変換したものです。

アニメのネタバレが少しあります。第２話以降は、アニメ１期の、その後の物語です。

２０１８／１０／１２　『通常版』を大幅に加筆修正しましたが、こちら（ツチノコ視点版）は、古い内容のまま置いておきます。

目次

第1話「いつか」――1
第2話「みんな」――8
第3話「点検」――19
第4話「フライト」――27
第5話「ふぁんさーびす」――38

第1話「いつか」

黒い巨大セルリアンとの戦いを終え、オレたちはかばんたちを島の外へ送り出すための準備を進めていた。バスを水陸両用に改造する計画だ。うまくいきそうだが若干の不安もあった。もう一つの案があってもいいだろう。思い当たることがあった。

海岸にある飛行場。そこにある建物は、島の遺物の中でもあまり調査していなかったものだ。建物の大きな扉は、以前調査したときには開かず、内部の調査は行わなかった。おそらく内側から固定されているのだろう。オレのピット器官では「中に何かある」程度しかわからなかった。どこか入れる場所がないか探した。建物のわきに、小さなドアがあった。

扉のレバーをガチャガチャといじってみたが、開かなかった。ここもダメか……ダメもとで力いっぱいレバーを下げた。バキッと音がして、ドアが少し開いた。壊しちまった……潮風で傷んでいたのかもしれない。

内部に入ると、想像以上のものがあった。巨大な鳥のようだが、明らかにヒトが作ったものだと分かった。中央部分はバスのようにヒトが入れる構造になっていた。図書館の本で見たことがある。これは、飛行機だ。羽根車、これは確かプロペラと言ったな。

それが左右の翼に一つずつ付いていた。

建物の内部と周囲を簡単に調査した結果、次のようなことが分かった。飛行機の状態は比較的良好で、消耗部品の交換と機体の調整を行えば飛ばせるかもしれないこと。本棚に残されていたたくさんの本に、飛行機の整備の方法や、整備の記録が書かれているらしいこと。棚や箱に、よくわからない部品や工具がたくさんあること。建物の外のタンクに燃料が残されているらしいこと。この大きな建物に繋がっている塔は、飛行機の離着陸を見守るためのものと思われるが、そこにある電子機器などは作動しないこと。

バスの改造と平行して、飛行機を飛ばせるように整備してみようと思った。

調査を進めると、考えが甘かったことに気づかされた。飛行機は、ヒトの作った遺物の中でも高度なものだ。コックピットは複雑で、エンジンをかけることも電源を入れることもできなかった。ピット器官で内部を透視しただけでめまいがした。一部のカバーを開けてみたが、何がどうなっているのかさっぱりわからなかったうえに、傷んでいる部品が所々にあるようだった。まず本棚に残されていた整備マニュアルと整備記録を解読しなければならなかったが、ほとんど読めなかったし、理解できなかった。専門的な知識と技術があるヒトでなければこれを飛ばすことはできないだろう。オレの手に負える代物ではなかった。

かばんたちの出発の日が迫ってきていたが、オレはまだ諦めきれず、どうにかできな

いかと、図書館で飛行機について調べ、格納庫で飛行機をいじる、を繰り返していた。

そんなある日のこと、オレはいつものように格納庫で飛行機をいじっていた。オレは、フードの上から焦げ茶色のカウボーイハット（ソフトハット）をかぶり、茶色のレザージャケットを羽織っていた。いつもの下駄ではなく、茶色のブーツを履いていた。昔見た映画の、主人公の恰好だ。格納庫にあるロッカーに、なぜか一式入っていた。せめて気分だけでも、と着てみたらけっこう気に入った。それに、下駄だとラダーペダルが踏みにくかった。

サーバル　　「すっごーい、大きな鳥みたい！」

格納庫に誰か入ってきた。今見つかるとまずい！オレは飛行機の陰に隠れた。サーバルと、かばん、か？

かばん　　「真ん中の部分は、ちょっとバスに似てますね。ラッキーさん、これにヒトが乗って飛ぶんですか？」

サーバル　　「えー、こんな大きいもの飛ぶわけないよ」

ラッキービースト「飛行機ガ、飛ブ仕組ミヲ解説スルヨ」

ラッキービースト「ココデハ無風状態ト仮定シテ解説スルヨ。エンジンニヨッテプロペラヲ回転サセルト、前ニ進ムチカラ、スナワチ推力ガ、生マレ、コノ推力ニヨッテ機体ガ前進スルンダ。機体ガ前進スルト、主翼ノ周リニ、空気ノ流レガ生マレルヨ。コノ

空気ノ流レト主翼の断面形状ニヨリ主翼ノ上面ト下面ニ、気圧ノ差ガ生マレルヨ。コノ気圧ノ差ト、主翼ノ迎エ角ノ作用ニヨッテ機体ヲ持チ上ゲルチカラ、スナワチ揚力ガ生マレルンダ……」

教科書通りの解説だな。しかし、あの声で長々と説明されると、頭が痛くなるな。

ラッキービースト「……揚力ハ、機体ト空気ノ相対速度、スナワチ対気速度ガ早イホド、大キクナルヨ。機首ヲ上ゲテ主翼ノ迎エ角ヲ大キクスルコトデモ揚力ガ大キクナルヨ。機体ガ加速シ、必要ニ応ジテ機首ヲ上ゲ、揚力ガ、重力ヲ上回ルト、機体ガ、路面カラ離レ、飛行機ハ、空ヲ飛ブンダ。チナミニ、現代ノ多クノ飛行機デハ、主翼ニフラップト呼バレル揚力ヲ増スタメノ……」

サーバル　「みゃみゃみゃ、みゃ……」

サーバルが倒れた!

かばん　「サーバルちゃん!」

かばん　「ラッキーさん、もういいですから!大丈夫ですから!」

サーバル　「わたし、がんばりすぎちゃった。わかろうとしたけど、だめだった」

無理に理解する必要はないと思うが……無茶しやがって……。

かばん　「サーバルちゃん、大丈夫?」

サーバル　「海の、むこう、かばんちゃんと、いっしょに行きたかったな……はっ

……」

サーバルが意識を失った……ように見えた。……海のむこうとか、いっしょに行きたいとか今言ったらだめだろ……サプライズが……。

かばん　「サーバルちゃん！」

かばん　「どうして、どうしてこんなことに」

妙に芝居がかってるが、このまま放っておくわけにも……仕方ねえ、出ていくか。

ツチノコ　「何やってんだお前ら」

かばん　「ツチノコさん！サーバルちゃんが！」

ツチノコ　「深刻な状況には見えんがなー」

サーバル　「ううう、あたまが、いたいよ」

ツチノコ　「とりあえずちょっと休め」

飛行機の後部座席に3匹が座った。サーバルとかばんが隣り合う席に、オレがかばんと向かい合う席に座った。

サーバル　「ツチノコ、さっきから気になっていたんだけど、その恰好なに？」

かばん　「僕も気になっていたんですが、なんか触れちゃいけないというか、聞けなかった」

触れちゃいけないってなんだよ！そんなヤバイ恰好なのかオレ！

ツチノコ　「考古学者に飛行機っつったらこの恰好なんだよ！」
オレは島の遺物を調べていただけで考古学者ではないし、あの映画は飛行機がメインの話ではないのだが、気分だ、気分。
かばん　「こすぷれってやつだね。でも、それならムチが必要なのでは？」
ツチノコ　「なんでお前はそんなこと知ってるんだよ！」
ムチが見つからなかったんだよ！オレはしっぽを床にピシピシと打ち付けた。
かばん　「しっぽがムチの代わりなんだね」
そういうことにしといてくれ……。
サーバル　「よくわかんないけど、なんか似合ってない気がするな。フードの上からぼうしをかぶるのも変だし」
わかってるよ！言わないでくれよ！
サーバル　「フードかぶってると落ち着くんだよ！」
フードはオレの頭みたいなもんだしな。
サーバル　「ツチノコはここで何してたの？」
ツチノコ　「例の改造がうまくいかなかったら、こいつを飛ばそうと思ってな」
サーバル　「知らないところでがんばってたんだね、ツチノコはやさしいね」
お前はなんでそうまっすぐなんだ……顔が熱い……。

かばん　「例の改造ってなに？」
まずい！どう言うべきか……。
ツチノコ　「それは……そのうち分かるから気にするな」
かばん　「それで、飛ばせそうなんですか？」
本当に気にしないんだな……飛ばせそう…か……。
ツチノコ　「キビシイなー。あちこち傷んでるし、操縦も難しい。飛ばせたとしても、飛行中にトラブルが起きたらおしまいだからな。あの映画みたいになっちまう」
サーバル　「やっぱり飛べないのか……」
ツチノコ　「あれには間に合わんかもしれんが、燃料はあるし、図書館で調べて、博士たちと協力して、時間をかけて整備すればいつかは……」
サーバル　「いつか、飛ばせるといいね」
本当にそう思う……あれ？　いつの間にか飛ばす理由が変わってるぞ？
かばん　「そういえばあのヒト、ヘビが苦手だったよね？」
ヘビがヘビ恐怖症のヒトの恰好を……。
ツチノコ　「……」
そもそもオレってヘビなんだろうか……わからなかった。

第２話「みんな」

結局、飛行機の修復はかばんたちの出発には間に合わなかった。だがオレはこれを飛ばすことを諦められなかった。飛行機は飛ぶためのものだ。飾っておくためのものではない。

多くのフレンズに協力してもらい、試行錯誤しながら飛行機を修復していった。

飛行機は、大物部品の状態は良かったが、劣化した消耗部品や損傷した部品などがあり、修理と調整が必要だった。

ワシミミズク（助手）　「読めないのです」

アフリカオオコノハズク（博士）「わけがわからないのです」

ツチノコ　「ちきしょう……難解すぎる……」

……図書館の本によって知識を得た。格納庫に残されていた、整備マニュアルの解読を行った。

博士　「ライオンにもらった部品、穴径を大きくすれば、使えるかもしれないの

ツチノコ　「硬そうだな。精密な加工できるか？」
アリツカゲラ「ランプの部品、使えないでしょうか？」
ツチノコ　「分解すれば……」
助手　「これはコツメカワウソにもらいました。川底に落ちていた物を拾ったそうです」
ツチノコ　「やった！ぴったりだあ！」
……多くのフレンズに協力してもらって、交換部品（の代用品）や工具を探した。

ツチノコ　「パッキンが劣化してるな……」
アメリカビーバー　「バスのタイヤ、加工して使えないッスかね」
……放置されたバスや、ヒトの作った遺物の部品の流用を行った。

アメリカビーバー　「きれいな図面ッスね……」
タイリクオオカミ　「ここの合わせ、高い精度が必要だけど、測定じゃわからないから現物合わせになるね」
オグロプレーリードッグ「大きめに作って、削って調整できるであります」

こいつら、オレより理解してる……。
……タイリクオオカミに新規に作る部品の図面を引いてもらった。

オグロプレーリードッグ「出来たであります！」
アメリカビーバー　「相変わらず速いッスね」
ツチノコ　「木工だけじゃなく、金属加工も早いのかよ……」
……アメリカビーバーとオグロプレーリードッグに、足りない部品の製作、修復作業を頼んだ。

ツチノコ　「この解説書、誰が持ってきたんだ？」
博士　「それは、たぶん……」
今なにか、扉のかげにいたような……。
……ラッキービーストは相変わらずしゃべらなかったが、陰で協力してくれた。

スナネコ　「本当にこんなものが飛ぶんですか？」
スナネコが脚の格納部に手を突っ込んでいた。
ツチノコ　「やめろ！余計なことするな！」

……スナネコに邪魔された。

ツチノコ　「ダメだ、作動油が漏れてる……」

博士　「ここは、われわれの手には負えないのです」

アメリカビーバー　「なんか、動きが固いッスね、あれだけ調整したのに」

ツチノコ　「カバーが閉まらねえぞ、寸法間違ってねえか？」

オグロプレーリードッグ「また折れてしまったであります……」

ツチノコ　「正確な図面だ。寝てないだろ、少しは休めよ」

ツチノコ　「いてっ、切っちまった」

長い時間が流れた。無線等の一部の電子機器を除き、飛行機はほぼ修復された。

修復はできたのだが、飛行機の調整やテストには、予想以上の時間がかかってしまった。整備マニュアルの、調整やテストの項目は気が遠くなるほど多く、一つ一つクリアしていかなければならなかった。

オレたちはエプロン（駐機場）で、飛行機のエンジンのテストをしていた。オレはコックピットの左側、機長席に座って、左右のプロペラが高速回転しているのを見ていた。部品の痛みこそ少なかったものの、恐ろしく複雑で調整に一番苦労したのがエンジンだった。

ツチノコ

「今日は快調、だな」

オレは右を見た。誰もいなかった。初飛行時の機長はオレに決まっていたが、副操縦士が必要だった。

まずシミュレーター（温泉宿のゲーム）でパイロットの試験を行った。

期待されていた、鳥系のフレンズは、自分の飛行感覚で操縦してしまい、かえって危険なことが判明した。

縄張りが遠く、飛行場に通う、あるいは飛行場付近で生活するのが困難なフレンズは、選抜から外した。

整備員である、アメリカビーバーとオグロプレーリードッグは、鳥系のフレンズに運

んでもらうか、徒歩で飛行場に通っていた。

シミュレーターの操縦で特に優秀だったのは、キタキツネだった。「ゲームで鍛えてる」というのは伊達ではなかった。

副操縦士選抜試験　第２回　兼　操縦訓練　第４回

シミュレーターで成績の良かったフレンズを対象に、ハイスピードタキシー（地上滑走）試験を行った。

――――　タイリクオオカミ　――――

ツチノコ　「止まれ、止まれええええ！オーバランしちまう！」

飛行機は、オーバラン寸前で止まった。

タイリクオオカミ　「いい表情（かお）いただき」

タイリクオオカミ：器用で物覚えも良かったが、心臓に悪い操縦を行ったうえ、試験中にスケッチを行う問題行動があったため失格。

まあ、どちらかといえばエンジニアだし、そっちのほうで活躍してもらおう。

――――　パンサーカメレオン　――――

パンサーカメレオン　「怖かったでござる……」

ツチノコ　「まあまあだな……半分、消えてるぞ！」

パンサーカメレオン：一通りこなしたが、緊張しすぎて姿を消してしまい、動作が見えなくなって危険だった。保留。

――――　スナネコ　――――

スナネコは、オレの近くにいたから、といういい加減な理由で連れてきた。以外とシミュレーターの操縦は上手かったが、すぐに投げ出しやがった。

ツチノコ　「よし、エンジンスタート……って居ねええ！」

ツチノコ　「……ま、わかってたけどな……」

スナネコ：エンジンスタート前にどこかへ行ってしまい失格。

そのあと近くの砂浜に穴が見つかり、スナネコがその中で寝ているのが発見されたらしい。あいつ、夜行性だからな。ちょっとかわいそうなことをしたか？

――――　アルパカ・スリ　――――

アルパカ・スリ　「うまくいかないもんだにぇ」

アルパカ・スリ：ひと通りこなしたが、不安定なので保留。

――――　ジャガー　――――

ジャガーの縄張りは飛行場から遠かったが、頼まれたら断れない性格のためやってきた。

ジャガー　「わからん……全然わからん……」

ジャガー：初めはシミュレーターよりはるかに複雑なコックピットを見て困惑したが、操縦は器用にこなした。合格。

―――　カバ　―――

カバ　「あら、取れてしまいましたわ」

ツチノコ　「なにやってんだ、お前えええ！」

カバ：精神面は強かったが、操舵輪（ヨーク）を破損させやがったので失格。

―――　リカオン　―――

リカオン　「オーダー……完了しました……」

ツチノコ　「なかなかいいな」

リカオン：そつなく一通りこなしたが、緊張しすぎなのがちょっと不安だ。合格。

―――　サバンナシマシマオオナメクジ　―――

「誰だお前！、選抜メンバーじゃねえだろ！、つーかどうやって操縦する気だ！」

ツチノコ　「うああ!!なんだそれ！なに出してんだ！やめろさわるな気持ちわりい……」

サバンナシマシマオオナメクジ：そもそもフレンズなのかも不明。触手のようなものを使って操縦できたが、突っ込みどころが多すぎて失格。しかもそのあと座席がベタベタになってしまった。

――――――　フンボルトペンギン（フルル）――――――

フルルは、シミュレーターではキタキツネと並び天才的な操縦をみせた。

マーゲイ　「さすがフルルさん！無骨なコックピットとのギャップがいいですねえー」

フルル　「このいす座りやすいねー」

ツチノコ　「そろそろ行くぞ」

マーゲイ　「アイドルにそんな危険なことさせられません！」

ツチノコ　「なんでだよ！もったいねえだろが！」

フルルがうしろを振り向き、何かを見ていた。

フルル　「……」
マーゲイ　「フルルさん？」
フルル：非常にもったいなかったが、マネージャーのストップがかかり棄権。

――――　キタキツネ　――――

滑走路の端。
飛行機のプロペラとエンジンの音が変わった。ブレーキリリース。飛行機が滑走路を走り、速度を増していった。機首を上げ、エンジンの出力を落とした。飛行機は徐々に減速し、自然に機首が下がった。前脚が接地し、主脚のブレーキとプロペラピッチ角の変更（逆推力）により、さらに減速した。滑走路に余裕を残し、十分に減速した飛行機は、滑走路の端でUターンして、エプロンへ戻っていった。
手順通り。安定した走り。非の打ち所がなかった。
キタキツネ（機長席）「飛べないとおもしろくないね」
ツチノコ　「……完…壁……だ……」
キタキツネ　「……うしろ、なにかいる」
ゾクリとした。オレは振り返って後部座席を見たが、何もいなかった。
ツチノコ　「何もいねえぞ、怖いこと言うなよ……」

オレたちは駐機場へ戻ってきた。上空で様子を見守っていたハシビロコウがおりてきた。

ハシビロコウ　「しっかり真ん中を走ってて、ふらつきもほとんどなかった」

それはオレもわかった。滑走中、窓から見える滑走路の線がきれいに流れていたからだ。少し横風が吹いていたはずだが、なぜあんなに安定して制御できたのだろう？

そのあと、厄介なことが起きた。後部座席にペンギンの幽霊が現れるいう噂が流れ、ほかの訓練生が怖がって試験が出来なくなってしまったのだ。タイリクオオカミが訓練生を怖がらせる嘘をついたのでは、と疑ったが、彼女は否定した。結局何だったのかは不明だ。ちょっと怖かったが、オレは実際に幽霊を見ることはなかった。キタキツネいわく、「いなくなった」らしい。

初飛行時の副操縦士はキタキツネに決めた。機上整備員として、アメリカビーバーとオグロプレーリードッグに搭乗してもらうことにした。

第3話「点検」

オレたちは訓練と機体の調整を繰り返し行った。博士には慎重すぎると言われたが、落ちれば死ぬ。命がけだ。慎重にもなる。それに、機体が大きく損傷したら修理は不可能だろう。今までの苦労が水の泡だ。

アメリカビーバー　「ちょいとお待ちを……もう一回点検してから……」

ツチノコ　「何回目だよ！」

ビーバーはオレ以上に慎重だった。あきれるほどに。

キタキツネの操縦は、シミュレーター、地上滑走ともに上達していった。もともと驚異的だったのだが、「ゲームで鍛えてる」なんてレベルじゃなくなっていた。

シミュレーターでは空対空戦闘やエアショーばりのアクロバット飛行まで完璧にこなした。普通に飛ばすだけなのだからそこまで必要ないのだが……。

機体の調整がひと段落つくと、調整をビーバーたちにまかせて、オレは格納庫を離れ、温泉宿のシミュレーターで必死に訓練した。オレは機長だ。搭乗者の命を預かるんだ。手を抜くことは許されない。それに、キタキツネに負けるわけにはいかない。せめて同じレベルには……。

二日ぶりに帰ってきた格納庫。飛行機は整備中だった。飛行機のそばのテーブルで、タイリクオオカミが図面を広げていた。機内へ入って、異様な光景に驚いた。

ツチノコ　「なんだ、ごりゃあああ！」

飛行機の操舵輪（ヨーク）が操縦桿（スティック）に変わっており、座席のシートベルトが

全て、５点式シートベルトに変わっていた。

副操縦席にキタキツネが座っていて、客席ではアメリカビーバーとオグロプレーリードッグが、座席のわきにある折り畳み式テーブルを取り外していた。

ツチノコ　「……オレのいない間に……なんでこんな……」

無茶苦茶しやがって！オレはうつむいた。体が怒りに震えた。

キタキツネが、操縦桿を握って言った。

キタキツネ　「このほうが操縦しやすい」

確かにシミュレーターはスティックだったが、大改造だろ……。

アメリカビーバー　「えっと、シートベルトは、このほうが安全ッスから……」

５点式なんて必要ねえだろ……戦闘機じゃねーんだぞ……。

オグロプレーリードッグ「軽くするために部品を外していたであります！」

必要な部分を損傷させたらどうする……削り過ぎれば重量バランスにも影響が出る

ぞ……。

これは、もっとやりやがったな……。

ツチノコ　「……ほかに、どんな改造を……」

アメリカビーバー　「以前から、ちょいとずつやってたんスけど……エンジンの制御系をいじって出力制限を上げて、翼の後縁を延長して動翼の面積を増やして、動翼の制限角度を変更して、操縦応答性を上げるように……」

ツチノコ　「やりすぎだ！そんなことしたらバランスが狂っちまうだろが！」

アメリカビーバー　「……えっと、計算上は問題ないはずッス」

計算上？計算上だって？オレは顔をあげ、言った。

ツチノコ　「……お前ら……お前らは死ぬ気か!!」

オレは感情にまかせて機外へ飛び出し、走った。あいつら何考えてやがる！……危険なら飛ばせない……計画中止だ……涙が出てきた……。

気がつくとオレは滑走路の端に立っていて、そこから伸びる滑走路を見ていた。あの改造、運動性を上げるためのものだ。なぜそんなことを？普通に飛ぶなら必要ないはずだ。

キタキツネが走って滑走路にやってきた。

キタキツネ　「はあ、はあ……ごめん、ごめんなさい……ぜんぶ、ぼくがやれって言ったの」

やっぱりな……。

ツチノコ　「お前と、あの心配性なビーバーがやったことだ。安全なんだろうよ」

博士と助手の知識、ビーバーの設計、オオカミの作図、プレーリーの工作。最強すぎる。間違いが起きるはずがない。だがこいつはちょっとタイプが違う。おそらく他のみんなも気づいているだろう。だからこいつの提案に乗ったんだ。正直に話すか。

ツチノコ　「オレはな、怖いんだよ。……オレのわがままで、こんな面倒なことにみんなを巻き込んじまって。一人で飛べりゃいいが、落ちるだろうな。オレはそれでも構わんが、みんなの苦労が無駄になっちまう。……それに、時間がかかりすぎた。……ほかのやつら、みんな、あんなもの飛べないって思ってるんだ」

キタキツネ　「あれは飛べるよ、だいじょうぶ」

根拠もなくそんなことを……いや、根拠はあるんだ。自覚がないんだろう。オレはエンジニアとしてもパイロットとしても中途半端だが……。

ツチノコ　「……くやしいが……お前は……」

オグロプレーリードッグ「ツチノコどのー」

オグロプレーリードッグとアメリカビーバーがやってきた。
アメリカビーバー　「ツチノコさん、申しわけないっス、全部もとの形に……」
ツチノコ　「もう遅い。無理に戻すとかえって危険だ」
タイリクオオカミ　「やっぱりここにいたね」
タイリクオオカミも歩いてきた。
タイリクオオカミ　「私も謝らなければいかんな。済まない。……なにか悩んでいるようだが……みんな楽しんでいるんだよ。あれを飛ばすこと……君を手伝うことをね」
そうかよ、なら仕方ねえ。
ツチノコ　「……改造個所を教えろ。……全部オレが確認する」

初飛行前夜。格納庫。
格納庫にはオレしかいない。何度も確認して、問題がないってわかっているのに、また飛行機の点検をしてしまっている。これじゃビーバーを笑えない。
ガチャリ、と格納庫わきのドアが開き、誰かが入ってきた。
ツチノコ　「うああ、誰だああ……スナネコ!、何でここに?」

おどかすなよ。……というかお前、砂漠にいたんじゃ……ここまで結構距離があるぞ……

スナネコはそばへ歩いてくると、飛行機を見て、言った。

スナネコ　「これは本当に安全なんですか？」

何を今さら……。いつものののんびりした口調だ。……いや、違うな……。

ツチノコ　「何度も言っただろ。落ちねえよ」

スナネコ　「絶対に、ですか？」

絶対に……絶対、では無いな。危険がないと言ったら嘘になる。ここは、どう言うべきか……

ツチノコ　「……」

黙ってしまった。スナネコがオレの顔を見た。無表情だった。

スナネコ　「……明日は見に行けません。ボクは夜行性なので」

怒らせちまったか？　見に来てくれないのは残念だが、仕方ねえか……それって、明日オレに何かあったら、会えるのは今夜が最後になるってことだよな……。

ツチノコ　「……そうかよ……」

間。

なんだ？こいつはどうしてほしいんだ？……どうする？

（[　抱きしめる　])
（[格納庫から追い出す])
（（（[　何もしない　]））） ↑ ピロリーン

何もしないのかよ！

スナネコは一歩踏み出し、オレに顔を近づけてくる。かわいい……とか思ってる場合じゃないぞ！……どうする？

（[　頭をなでる　])
（[　キスをする　])
（[　押し倒す　])
（（（[　何もしない　]））） ↑ ピロリーン

また何もしないのかよ！

ツチノコ　「……な……なんだよ」

そんな言葉しか出ねえのかオレ！わかってるだろ！

スナネコ　「なにもしないんですか？」

ツチノコ　「……何も？……」

やっぱり待ってるじゃねえか！見つめられていることに耐えられず、目をそらしてしまった。顔が熱い。仕方ねえ……。

ツチノコ　　「そういうのは……こいつが飛んでからだ」

先延ばししてしまった……どんだけ臆病なんだオレ……。

スナネコはかすかに笑うと、一歩引いて背を向け、足早にドアから出て行った。

今は思い出を作るより、おあずけにして希望を持たせた方がいいよな。そう自分に言い訳して、オレは飛行機の点検作業に戻った。……点検、どこまでやったか忘れちまった……。

第４話「フライト」

初飛行の日。
エプロンにはたくさんのフレンズが集まっていた。
ツチノコ　「なんでこんなにいるんだよ……」
オレは飛行機の陰に隠れていた。　オレは、例の帽子をかぶり、例のジャケットを着て、例のブーツを履いていた。勝負服ってやつだ。あの映画の内容を考えると、ちょっと不吉な気もしたが、そんなの吹き飛ばしてやる。
アメリカビーバー　「点検終わったッスか？」
アメリカビーバーが飛行機のドアから顔を出していた。
ツチノコ　「問題ねえよー」
タイリクオオカミ　「こっちも問題ないよ」
脚の陰にしゃがんでいた、タイリクオオカミも答えた。
初飛行のメンバーは以下の通りだ。
・　機長　：ツチノコ

・　副操縦士　　：キタキツネ
・　機上整備員　：アメリカビーバー・オグロプレーリードッグ
この二匹に乗ってもらうのは念のためだ。ビーバーだけでも良かったのだが、プレーリーがいっしょに行きたいと言って聞かなかった。
・　付き添い　　：ギンギツネ
唯一のお客さんだ。キタキツネについてきた。
・　チェイサー（随伴機）　：トキ・ショウジョウトキ
機外から飛行状態を見守る役だ。知り合いだからということと、飛行能力の近いペア、ということで頼んだ。
・　管制　　：アフリカオオコノハズク（博士）・ワシミミズク（助手）
離着陸の安全確認をやってもらう。管制といっても無線が無いためあまりやることが無い。
・　地上整備員・記録係　　：タイリクオオカミ
飛行前、飛行後の機体の点検と、飛行の記録（スケッチ・クロッキー）をやってもらう。いっしょに乗る案もあったが、地上からの記録は重要だ。ほかに適任者はいなかった。

・　地上整備員・マーシャラー：ハシビロコウ

エプロンで機体の誘導を行ってもらう。操縦士選抜試験などで手伝ってもらった縁と、冷静に見守る能力があったため頼んだ。必要なら飛んで誘導してもらうことも可能だ。

点検を終えた飛行機のそばに、博士と助手が飛んできた。

助手　「ついに、この時がきたのですね」

博士　「待ちくたびれたです」

ツチノコ　「博士、その……お願いがあるんだが……」

本当はスナネコに頼みたかったんだがな……。

博士　「なんですか、いっしょには乗りませんよ」

ツチノコ　「ジャパリまん持ってたら一つくれねーか？　あとで必ず返すからさ」

必ず生きて帰る。伝説的なパイロットが言ったジョークだ。本当はガムをもらうんだが、そんなもの誰も持っていないだろう。

タイリクオオカミ「本来は私の役割なんだが、あいにく持ってないんだよ」

確か同僚に言ったんだよな。

博士　「意味がわからないのです。というか、なんなのですかその恰好は

？」

知らねえのかよ、両方とも！

ツチノコ　　「考古学者に飛行機っつったらこの恰好なんだよ！」

あの時も同じことを言ったな。なんか懐かしいな。

全員の搭乗が完了した。

飛行機の前にたくさんの観客がいた。ハシビロコウとタイリクオオカミが観客を整理してくれているが、こいつらはプロペラの怖さを知らないだろう。オレはコックピットわきの窓をから顔を出し、叫んだ。

ツチノコ　　「お前らー、近寄るんじゃねーぞー！」

ハシビロコウが飛行機の前に立ち、後ろを振り向いた。

ハシビロコウ　「みんな、私よりも下がって」

ハシビロコウが手を上げ、こちらに向けハンドサイン（エンジンスタート）をおくってきた。オレはエンジンスタートの操作をした。

ガスタービンの始動音と共に、飛行機の左のプロペラが、ゆっくりと回り始めた。プロペラは徐々に回転数を上げっていった。続いて右のプロペラが回り始め、回転数を上げっていった。

エンジンスタートのあとは再度点検を行う。何度も繰り返した手順だが、全ての確認

を2回、いつも以上に慎重に行った。ハシビロコウの指示で、操縦桿、ラダーペダルを操作し、各舵面が正常に動くことを確認した。軽くエンジンの出力を上げ、エプロンから滑走路へとゆっくりと移動していった。滑走路に乗ると左へ曲がり、滑走路の北の端までゆっくりと移動していった。

機内

ギンギツネ　「なんでいすに縛り付けるのよ?」
アメリカビーバー　「それはシートベルトといって、安全のための装備ッス」
うしろから会話が聞こえてきた。縛り付けるとか言うなよ……
ギンギツネ　「もっと乗れたんじゃないかしら?もったいないわね」
キタキツネ　「犠牲は少ないほうがいいから」
右隣のキタキツネが答えた。怖いこと言うな!　集中できねえだろ!
ギンギツネ　「また不吉なことを……」
キタキツネ　「いいよ、ギンギツネといっしょなら」
ギンギツネ　「……そう……」
オグロプレーリードッグ「ビーバー殿といっしょなら、かまわないであります!」
アメリカビーバー　「オレっちも同じッスよ……」
ツチノコ　「お前らなんで死ぬのが前提なんだよ!」

飛行機をUターンさせ、機首を滑走路の離陸方向に合わせた。ブレーキをかけたまま、左のエンジンの出力を上げ、すぐに落とした。今度は右のエンジンの出力を上げ、すぐに落とした。そしてまた一通りの点検を行った。

コックピットからは見えなかったが、チェイサーのトキとショウジョウトキが、飛行機の真上　でホバリングして待機しているはずだ。

「全て正常。滑走路上に障害物は無いな？」

ツチノコ　「だいじょうぶ」

キタキツネ

ツチノコは窓の外を見た。少し離れたところに、博士と助手が浮かんでいた。

博士は緑色の巨大な旗を上げた。「離陸（クリアード フォー テイクオフ）に支障なし」、だ。

オレはスロットルを上げた。プロペラの音が変わった。ブレーキリリース。飛行機が動き始めた。

飛行機は徐々に速度を上げていった。

怖い。オレは一瞬、操縦桿を引くのをためらってしまった。

キタキツネ　「はやく上げて」

上げるのが遅れると危険だ。キタキツネに言われて慌てて操縦桿を引いた。

機首が上がり、すぐに主脚が路面から離れた。慌てて操縦桿を引いたせいで、飛行機はやや急な角度で上昇した。ヘタクソな離陸になっちまった……。離陸すると、すぐに

フラップを上げた。
離陸した機体が左に傾き始めた。何だ？何が起きてる!?
キタキツネ　「戻して、かたむいてる」
ツチノコ　「わかってる！」
急な操作は危険だ、操縦桿を少し右へ……ダメだ戻らない……
アメリカビーバー　「ツチノコさん！パワーを落とすッス！」
オレは、ほぼ全開だったスロットルを戻した。機体はゆっくりと水平を取り戻した。カウンタートルク？起きないはずじゃ？……スピードを出しすぎた。チェイサーはついて来られたか？
安心する間もなく、機体は左右（翼を振る方向）にふらつき始めた。揺れを抑えようと操縦桿を左右に倒すが、揺れはおさまらないどころか悪化していった。
ツチノコ　「おさまらねえ！……なんでっ……」
操縦桿の操作と機体の挙動が逆転してる？
キタキツネ　「おちついて、まんなかに」
言われた通りに操縦桿を動かすのをやめ、中央に保つと、機体は安定を取り戻した。操縦桿と機体の挙動にずれがあることに気づいた。シミュレーターはもっと反応が良かった。自分で揺らしていたんだ。

ツチノコ　　「さすが……だな……」
キタキツネはなぜこんなに的確な指示ができるんだ？同じシミュレーターで訓練したのに……。
左を見ると、トキが飛んでいるのが見えた。ついて来られたようだ。彼女はこちらを見て、一定の距離を保って飛んでいた。ちらりと右を見ると、ショウジョウトキが飛んでいた。オレはすぐに視線を前へ戻した。このスピードで真横に編隊を組むのはかなり難しい。飛行機とフレンズでは大きく飛行特性が違う。ついてくるだけでも難しいはずだ。二羽の飛行能力の高さに驚かされた。
うしろから会話が聞こえてきた。
アメリカビーバー　　「やっぱり、シミュレーターとは違うんスね……」
オグロプレーリードッグ「本当に、本当に飛んだであります！」
アメリカビーバー　　「……オレっち、ちょっと涙が出てきたッスよ」
ギンギツネ　　「ひこうきって、こういうものだったのね……」
不覚にも涙がこぼれてしまった。隣のキタキツネに気づかれなかったよな……。
オレは機体を軽く左右に旋回させるのを繰り返した。シミュレーターとは少し感覚が違うが、訓練の成果が出てきたようだ。
ツチノコ　　「感覚がつかめてきたな。旋回して戻るぞ」

落ち着け、ゆっくりと、やさしく、高度を保って旋回させろ……やった……機体は思い通りに動いてくれた……。

キタキツネ　「気持ちいい飛びかた……ツチノコは下手だけど、やさしくて、すごく気持ちいいときもある」

ツチノコ　「変な言い方するな!」

言い方はアレだが、やはりキタキツネは的確だった。

アメリカビーバー　「多分、飛行機の操縦も、フレンズによって得意なことが違うんスよ」

そういうものなのだろうか?キタキツネは別格な気がするが。

旋回を終え、進路を飛行場に向けて直線飛行に移った。機体は安定しているし、そろそろいいだろう。

ツチノコ　「操縦、代わってみるか?」

オレはは前を見たまま言った。キタキツネへ操縦を渡し、操縦桿から手をはなし、ラダーペダルから足をはなした。

ツチノコ　「やっぱり……安定してるな……」

キタキツネが突然、こちら側に手をのばしてランディングギア（脚）レバーを上に上げた。なにしてんだ、予定通りにやれ!

ツチノコ　「おい！初飛行ではギアを上げるなと……」
ガコンと音がした。手遅れだ。
キタキツネ　「足が出てるとかっこわるい」
かっこ悪いって、下りなくなったらどうする！
ツチノコ　「そういう問題じゃねえ！……表示は……上がってるな……確認するぞ」
キタキツネ　「ちゃんと上がってるよ。へんなかんじ、なくなったから」
キタキツネが妙なこと言ってるが無視だ。問題はないはずだが、念のため確認してもらおう。オレは窓の外のトキに手まねきをした。トキが飛行機に近づいてきた。近づきすぎると危険だが、打ち合わせ通りの距離を保ってくれた。
オレは窓の外のトキにハンドサインをおくった。（脚は上がっているか？）
トキがこちらを向き、両腕をあげて丸を作った。
ツチノコ　「大丈夫だ……仕方ねえ、まだギアは下ろさない。このまま行くぞ」
オレは何の気なしに足を動かした。つま先がラダーペダルにコツンと当たった。
キタキツネ　「！」
キタキツネがビクッとなった。なんだこの反応は。さらにコツンコツンと軽く蹴っ

てみた。操縦には影響ないはずだ。というか、向こうには伝わらないほどの弱い力だ。
キタキツネ　「ん……はっ……」
なんか反応してる……これは……おもしろい！
オレは手をはなしていた操縦桿を軽くにぎってみた。
キタキツネ　「ふぁっ……なに？なにしてるの？」
やはり敏感だ。
ツチノコ　「操縦に集中しろ」
操縦桿を指でパチンとはじいた。
キタキツネ　「いたっ」
今度は操縦桿を下から上へ、人差し指でこすってみた。
キタキツネ　「ぁあああ……くすぐったい……やめて」
ツチノコ　「……」
ちょっと怖くなった。これ以上はいろんな意味で危険な気がしたのでやめておいた。

第５話「ふぁんさーびす」

右斜め前に、飛行場が見えてきた。

ツチノコ　「コースを滑走路へ。高度を下げてローパスする……まだギアは下ろさない。ファンサービスだ。」

キタキツネ　「ふぁんさーびす……まっすぐじゃおもしろくない……ちょっと遊んでみる……シートベルト、しめてね」

ツチノコ　「お前何する気だ！」

オグロプレーリードッグ「キタキツネ殿、何をするでありますか？」

プレーリーは楽しげだった。

アメリカビーバー　「オレっち、嫌な予感がするッス……」

ギンギツネ　「シートベルトは締めてるわよ？」

キタキツネは、ギンギツネの言葉を聞くと、スロットルを上げた。プロペラの音が変わる。

キタキツネが操縦桿を左に倒す。まずい！これは非常にまずい！

飛行機が、機体を大きく傾けて左に急旋回を始める。操縦を奪うか？ダメだ、それは

かえって危険だ。飛行機は左に３６０度旋回して円を描くと、飛行場の前で切り返し、今度は右にに急旋回する。

ツチノコ　「なにしてんだお前えええ！」

飛行機は旋回を終え、直線飛行に戻り、ゆっくりと上昇していく。

ツチノコ　「無茶しやがって……」

オグロプレーリードッグ「さすがキタキツネ殿、すごいであります！」

アメリカビーバー　「そんな激しくしたら壊れちゃうッスよ」

オグロプレーリードッグ「……その言葉、昨夜も聞いたでありますな」

何だって？オレは後ろを振り向いた。

アメリカビーバー　「……それは言っちゃだめッスよ……」

アメリカビーバーは顔を赤くして手で覆い、うつむいた。今夜が最後になるかもしれないからってことか……オレたちと同じだよ、スナネコ……

ツチノコ　「……オレも、そうすりゃ良かった……」

飛行機が上昇を終え、右に１８０度旋回して反転、降下を始める。着陸、するんだよな？

キタキツネ　「もう一回……」

ツチノコ　「やめろおおお！」

ギンギツネ　「……死ぬ……死んじゃう……」
ギンギツネがぶつぶつ言っている。お客さん怖がってるじゃねえか……。
キタキツネ　「準備運動やめる……ちょっと苦しいけどがまんしてね」
準備運動？やめろってそういう意味じゃねえ！
飛行機が右にに急旋回。さっきと逆の動きだが、傾きは９０度に近く、旋回半径が小さい。強烈なＧが体を襲う。うしろの連中失神するぞ！
ツチノコ　「腹に力入れろお！」
飛行機が飛行場の前で切り返し左へ旋回。こちらも旋回半径が小さい。血が下がるのを腹に力を入れて耐える。操縦を奪うか？……それは危険だ……それに腕が重い……。
オグロプレーリードッグ「ちょっと苦しいどころじゃ……ないであります……」
飛行機がそのまま旋回を続けながら、らせんを描いて上昇していく。なんだこの機動は……この機体のパワーじゃ無理だろ……。
アメリカビーバー　「意識が……飛んじゃうッス……」
右を見る。キタキツネは歯を食いしばって耐えている。この状態でなんで操縦できるんだ？。

飛行機が高度を落として加速する。Gが弱まり、少し脱力する。飛行機が機首を引き起こして急上昇。空しか見えなくなる。垂直、を通り越し天地が逆になる。オレの帽子が飛ぶ。

オグロプレーリードッグ「さ、さかさま、で、ありますー」

飛行機はそのままの勢いで降下に転じ、水平飛行に戻る。宙返りしやがった……。

窓の外に一瞬、チェイサーの姿が見えたな。追うのをあきらめたか……。

飛行機が再度上昇して反転、滑走路に向けて急降下。

滑走路上を低空で通過しつつ、観客の前でグルグルと右回りに2回連続ロール（横転）。天地が激しく入れ替わる。すぐに左回りに2回連続ロール。姿勢指示器（水平儀）がグルグル回転する。

ツチノコ　「本当に……壊れ……ちま……」

アメリカビーバー　「目が回るッス……」

動きがおさまった。また上昇している。こんどはやや緩い上昇で、高高度へ上昇していく。どこまで上がる気だ？……ためている……大技が来る……。

キタキツネ　「歌が聞こえる。トキさんだね」

何を言ってるんだこいつ……意味がわからない……壊れたか？

ツチノコ　「……お前……何する気だ……何を言って……」

十分に高度をとると、飛行機が反転し、飛行場前の海へ向かって急降下。速度が増していく。機体がガタガタと振動し始める。早すぎる！分解しちまう！落ちる！

アメリカビーバー　「だめッスよ！バラバラになっちゃうッス！」

キタキツネ　「気絶しないでね」

何？

右を見る。キタキツネが操縦桿を強く引き、操縦桿が両ひざの間に入る……。

飛行機がガクンと機首を引き起こして上昇に転じる。強烈なＧで全員声も出ず、機体がきしむ音が聞こえる。一瞬目の前が白くなる……窓からは空しか見えず、空がグルグルと回転している。垂直上昇しながらロールしてる……速度が落ちていく……回転が止まる……さらに速度が落ちていき……止まる……止まった？速度計がゼロを示し……体が前に浮くような感覚……後退してる？バカな……。

突然機体が回転して、空が海に変わる。高度はさっきより低い。機体が降下しながら不安定な回転をしている。景色が不規則に回転している。姿勢指示器が理解不能な動きをしている。これは何だ？きりもみ？スピン？わからねえ……木の葉のように落ちてる……海が近づいてくる……すでに高度計はゼロ……スナネコ……ごめんな。

飛行機が機首を引き起こし、海面に突入する寸前で水平飛行に移る。助かった？……飛行機がすぐに海面スレスレで機体を大きく傾けて右旋回を始め、再び強烈なＧに襲わ

れる。目の前、右半分が海、左半分が空……翼端こすってねえか？……そのまま３６０度旋回すると、傾きが水平に戻り、飛行機はゆるく上昇していった。

キタキツネ　「もっと遊びたかったけど、燃料が少ないね。ざんねん」

まだ余裕があったのか……信じられないことだが、キタキツネは「安全の範囲内」（キタキツネの中の基準）で操縦していたんだ。単なるバカや無鉄砲なら、全員死んでいただろう。

ツチノコ　「……ここまで……とは……」

キタキツネをずっと見てきて、わかったことがある。

こいつは、感覚が非常に鋭い。景色や計器を見る視覚。エンジンやプロペラの音、機体が風を切る音、機体が振動する音を聞く聴覚。舵面から操縦桿とペダルに返ってくる、力や振動を感じる触覚。機体の姿勢や加速度、遠心力などを感じる平衡感覚。それに、幽霊や地場を知覚するような謎の感覚。感覚で集めた情報を集約すれば、機体の周りの空気の流れまで読めるはずだ。機体の不調や強度限界だってわかるかもしれない。

「地上滑走試験」と「準備運動」だけで機体の特性を完璧に理解して、鋭い感覚で集めた情報を、頭で瞬時に処理し、正確に手足を動かして思い通りに操縦しているのだろう。それも、なかば本能的に。こいつは操縦桿を握れば、鳥になれるんだ。

オグロプレーリードッグ「すごいであります！楽しかったであります！」

アメリカビーバー　「……回復……早いッスね……オレっち……震えが止まんないッス……」

アメリカビーバー　「……えと、ギンギツネ……さん？」

ギンギツネ　「……」

ギンギツネは失神していた。

キタキツネは天才なだけじゃない。こいつなりに努力していたことをオレは知っている。シミュレーターの訓練はオレと同じぐらいか、それ以上の時間やっていたらしい。仲間を危険にさらさないために。失神したやつがいたんだからやっぱり危険なんだが……努力をおこたらない天才。一瞬でもこいつに勝とうなんて考えたオレがバカだった……怒る気もおきなかった。

キタキツネ　「着陸するよ。操縦代わる？」

ツチノコ　「……いや、お前のほうが安全だ」

飛行機は、ゆるく旋回して進路を滑走路に合わせ、ゆっくりと高度を落としていった。ここからは予定通りだ。そろそろだ……左を見た。左側後方からトキが現れた。こちらを見ている。右を見ると、ショウジョウトキが飛んでいた。デルタ（三角）からアブレスト（横一列）へ。安定した、完璧な編隊だった。さすがと言うしかなかった。

キタキツネ　「ふぁんさーびす」

飛行機が大きく翼を振った。エプロンにいるたくさんの観客が見えた。歓声が上がったようだ。

博士が緑色の巨大な旗を振っているのが見えた。助手が巨大な矢印のパネルを掲げ、着陸方向を示していた。方向は離陸時と変わっていなかった。

飛行機はチェイサーを引き連れて……旋回して速度を落とし……フラップを下げ……脚を下げた。トキに脚が下がっているかハンドサインで確認すると、トキがこちらを向いて両腕で丸を作った。

……滑走路に進路を合わせ……徐々に高度を落とし……主脚が接地した。

ドン、と軽い衝撃があった。

機体はバウンドせず、スムーズに滑走路を走った。ここからの手順はハイスピードタキシーと同じだ。ブレーキ、プロペラピッチを反転。プロペラの音が大きくなった。

オレたちの乗った飛行機はエプロンに戻ってきて、ハシビロコウに誘導され、観客の前に止まった。チェイサーの二羽も戻ってきたが、飛行機の真上へ行ったため見えなくなった。ハシビロコウがこちらにハンドサイン（エンジン停止）をおくってきた。オレがエンジン停止の操作をすると、プロペラが回転数を落とし、止まった。

オレとキタキツネは機体の点検を済ませ、ドア開放の準備をした。

キタキツネはすぐに後部座席のギンギツネのそばへ行き、オレもその後を追った。操縦席のうしろに例の帽子が落ちていた。ギンギツネは意識を取り戻していたが、顔色が悪く、放心していた。

キタキツネ　「ギンギツネ……ごめん……」

オグロプレーリードッグ「ふたりは先にいくであります！」

アメリカビーバー　「主役ッスからね……ギンギツネさんは任せるッスよ」

オレが先に行かなきゃダメなんだよな……。

オレは例の帽子を拾ってかぶると、飛行機後部、左側にあるドアを開けた。ドアは外側へ下に開き、タラップになる。

機外へ出ると、オレから見て右側、機体前方の観客から拍手が起こった。やめてくれ、ものすごく恥ずかしい……苦手なんだよこういうの……。

オレはうつむいてタラップを降りた。顔が熱い。続いて、キタキツネが降りてきたが、オレのうしろに隠れて歩いた。やめろ……オレを盾にするな……。

続いてビーバーが降りてきた。

アメリカビーバー　「大丈夫ッスか？」

うしろを見ると、プレーリーが、ギンギツネを支えながら降りてくるところだった。

ギンギツネはプレーリーに支えられ、おぼつかない足取りで降りてきた。

ギンギツネ　「……うっ……おえぇ……」

……吐いてはいなかった。今回の一番の被害者だ……機内でやらなかっただろうな？

少し離れた所に、博士と助手が浮かんでいた。ジャパリまん、返してあげなきゃな。

オレたち搭乗員とハシビロコウは、観客の前に並んだ。上にはチェイサーの２羽がホバリングしていた。

観客の中に、タイリクオオカミがいた。そのとなりには……。

タイリクオオカミ「みんないい表情（かお）だ……ほら、行きなさい」

観客の中から、スナネコが飛び出してきた。

ツチノコ　「なんだおま……」

見に行かないって言ってたじゃねえか！いつからいたんだよ！

スナネコは、オレに抱き着くと、頬をオレの頬に押し付けてきた。やめろ！……こんな大勢の前で……スナネコは耳元でささやいた。

スナネコ　「……ねむい……です……夜まで寝てます……まってて…くだ……」

オレは、無理やり頬を離した。なんだよそれ反則だろ！……くらくらする……顔が熱い……。

今日の主役はこいつだな。前へ出ろよ。
オレはスナネコに抱き着かれたまま、隣に立つキタキツネの背中を押した。そして、キタキツネの手首をつかみ、高く掲げた。
再び、歓声が沸き起こった。

初飛行のあと、今までの膨大なスケッチをもとに、タイリクオオカミが漫画を書いた。
タイトルは「ひこうじょう」だ。

おわり